



ネパールで劇映画『カタプタリ～風の村の伝説～』を製作

伊藤敏朗

2006年12月、私は、千葉県立市川工業高校による「ネパール国際技術ボランティア隊」に随行して、初めてネパールの地を踏んだ。同校の生徒たちと一緒に世界遺産の街並みの調査を行いながら、そこが初めて来た場所なのに、まるで自分がこの町で生まれ育ったかのような不思議な郷愁にとらわれ、すぐに、自分の専門である映像メディアの実践研究を、この国でできないものかと考え始めた。

同隊の現地カウンターパートのガネシュ・ラマ氏は映画俳優であり、富山県利賀村が日ネ国交樹立40周年記念事業として製作した初の日ネ合作映画『ミティラ・ガウン（愛の架け橋）』の主演を演じた人だった。私の構想を相談してみると全面的な協力を申し出てくれ、私は帰国後ただちにシナリオ執筆にとりかかった。2007年2月、東京情報大学の学生2名とともに再びネパールを訪れ、現地のスタッフ・キャストたちと撮影に入った。

今回、私が監督した映画『カタプタリ（操り人形）～風の村の伝説～』（51分）は、ネパールの美しい山村を舞台に、山から降りてきた妖精と、人間の子供との心の交流を描いたファンタジーである。私は、もともとそのようなモチーフを映画化したいと思っていたが、最初の訪問でネパールの素晴らしさに触発され、一気に構想が固まった。信仰心の篤い人々が暮らし、精霊の棲む土地ネパールでこそ、このストーリーは成立すると思ったのである。ネパールの農村文化や家族のありかた、歴史的街並み保存などのテーマも盛り込んだことで物語は大きく膨らむこととなった。

撮影の主な舞台は、ナガルコットの山奥の“ゴラ”という小さな集落で、農家や納屋を借りて撮影をおこなったほか、村の共同広場にオープンセットを組んで村祭りのシーンなどを撮った。その後、ダンブスに入って、マチャプチュエ山から妖精を乗せた牛車が降りてくる場面を撮影した。ここでも村人の助けを借りて撮影用の道路をわざわざ造成した。その後、再びナガルコットで追加撮影を行い、3月27日、無事にクランクアップすることができた。

撮影期間中は思うにまかせぬ苦しい局面もあったが、常に現地の人々があたたかく協力してくれた上、女優のミティラ・サルマさん、ラマ氏などの出演陣、

カメラマンのアジット・バトレイ氏、音楽のブラカス・グルン氏など、ネパールの一級の映画人が一丸となって私を支えてくれたことで、全体的には順調で楽しい製作現場となった。現地のマスコミもたびたび好意的にとりあげてくれた。

このように現地での理解と協力が広がった理由のひとつは、外国人監督がネパールで撮る映画が、しばしば現地の深刻な社会状況をテーマに扱うことが多いのに対し、私の作品が大いなるネパール讃歌となっていることに共感が得られたのではないかという気がする。私とてネパールが抱えている多くの課題には十分目を向けているつもりだが、ファンタジーというものが持つ、夢や希望を与える力、人間愛を育む力というものも大切なものだと思っており、このような作品を日ネの映画を愛する者どうしが力をあわせて自主制作したということには意義があったのではないかと考えている。

同時に私は、自分一人の力の範囲を大きく超えたところで、これまでの永年にわたる日ネの交流の実績と評価が、日本人である私への期待となって支持されていることを強く感じた。その意味での責任の大きさに身が引き締まる思いでもある。

私は8月にもカトマンズを訪れ、本作の編集と録音を済ませた。完成の暁には、日ネ両国において発表・上映の機会を得たいと希望している。

(いとうとしあき 東京情報大学准教授・映像メディア論)



美しい民族衣装を着た主演のミティラ・サルマさんと筆者(右)ダンブスの撮影現場にて